

標本画～その伝えるものとは～

かわしまいつるう
川島逸郎 (生物画家)

標本画とは ～絵画との違い～

「絵」も、その表現や目的はさまざまですが、今回紹介するのは、「標本画」と呼ばれるものです。

多くの皆さんには、あまり耳慣れない分野で、はっきりしたイメージは浮かばないことでしょう。しかし、少し前までは、誰しもが、いつかどこかで目にしたものであったはず。そう、生き物の図鑑には、画家の手による絵が並んでいましたが、それが、標本画のひとつの形であったのです。

まず、「絵画」と「標本画」とは、どこが違うのでしょうか？ 簡単にまとめれば、前者は「対象から受けた雰囲気や印象を、受け手（画家）の自由自在な感性、表現で画面に表現する」のに対して、後者は「対象物を“そのまま”写実することに努めつつ、かつその中から、伝え手（論文や本の著者や画家）が、伝達すべき要点、強調したい点やその特徴を、慎重に選び出し、取り出して示す」ことを主な目的としています。

では、「写真」ではどうか？

対象を、「映像」「画面」として他者に伝えたいとき、今では、広く普及して誰でも手軽に使うことができる、デジタ

ルカメラを用いた「写真」が使われることが多くなりました。

しかし写真は、視覚的には、一見してひじょうに鮮明に見えるにもかかわらず、対象の細部や質を伝える手段としては必ずしも最適とはいえません。その大きな理由の一つは、ひじょうに雑多な情報が、整理されることなく、ひとつの映像の中に詰め込まれている点にあるでしょう。ヒトはそれを見たとき、全体や概観は容易に見渡すことはできても、細かな質を読み取ることは、写真に含まれた情報量が増せば増すほど、かえって難しくなります。

“写真”とは、「全体のイメージ」を、手早くかつ便宜的に伝えるのに適したツールで、こうした点に限っていえば、むしろ“絵画”に近い要素が大きいかもしれません。

「標本画」が伝えるものとは

「質」について、一つの例をあげましょう。例えば、昆虫の体は、多くの外骨格（がいぼん）から成り、その合わせ目は「縫合線」と呼ばれ、比較形態学上、ひじょうに重要な点です。ところが、体の表面にあらわれる“線”の中には、実は単なる“溝”にすぎない場合があります。両者は、一見「同じような線」

に見えても、裏に隠された性質や、情報の種類はまったく異なるのです。写真では、これらは同じように写り、背景に潜む違いを、そこから読み取ることはできません。いっぽう、標本画ではそれら二つを、異なる表現で描き分けることができます。

対象を観察し、それを他者へと伝える情報は、観察者の視点の数ほど、それこそ無限にあります。かたや、標本画の制作者は、その作図の過程で、伝えたい要点を踏まえた上で、多くの情報を、あらかじめ対象に対する理解を深めながら整理、取捨選択し、ポイントを絞り込むことに集中します。よく吟味された要点だけを、よりシンプルな形として、画面の中に凝縮させることに心を砕きます。

一目瞭然たる「標本画」とは、様々に検討されて選び抜かれた観察の要所をあくまでも立脚点、出発点に据え、その表現の仕方を慎重に模索する、といった過程を経て完成されてゆくものなのです。

ここでは、“点描”（てんびよう）を施し、立体感



図1 ウシカメムシ *Alcimocoris japonensis* (Scott). ウシの顔を思わせる姿が印象的。カメムシ類は、体の表面が独特の滑らかさを持つので、その点に心を配りながら描きました。

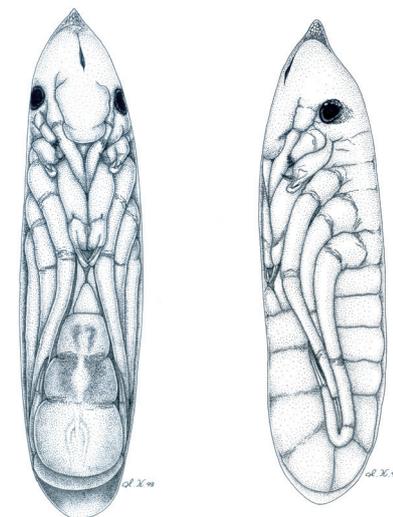


図2 サラサヤンマ *Sarasaschna pryeri* (Martin) の成熟卵。トンボの卵殻は透明で、外側からもダイナミックな胚子発生を観察できます。この図は、孵化（ふか）も間近な胚子ですが、口器や脚の原型も、すでに完成しているのが分かります。

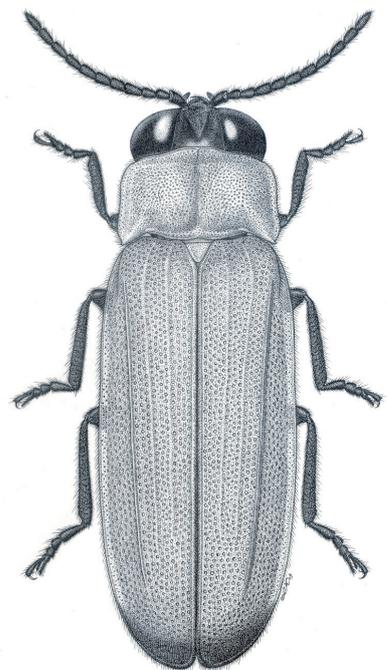


図3 キイロスジボタル *Curtos costipennis* (Gorham). 宮古・八重山諸島にみられ、よく発光する小さなホタル。レモン色の可愛らしい容姿（ようし）を持ちます。「スジ」とは、上翅（じょうし）に隆起した1本の筋が走ることから来た名前。

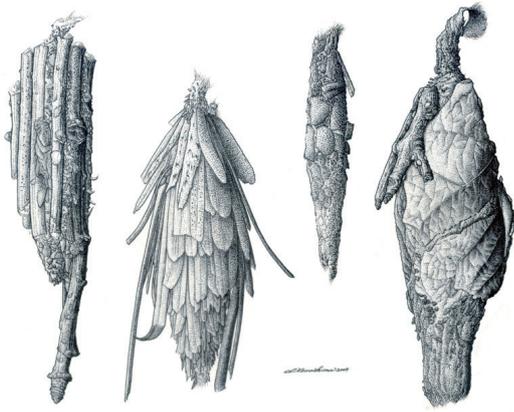


図4 ミノガ類4種の
 蓑: (左から). チャミノガ
Eumeta minuscula Butler/
 シバミノガ *Nipponopsyche*
fuscescens Yazaki/ クロツヤミ
 ノガ *Bambalina* sp./ オオミノガ
Eumeta japonica (Heylaerts). ミ
 ノガ類の幼虫が作る「蓑」は、
 種類によってつづり方が異なる
 ので、その特徴が一見して分
 かるようにと心掛けました。



図5 キアシブトコバチ *Brachymeria lasus*
 (Walker). 身近に多い寄生蜂(きせいほう)
 ですが、小さくて目立ちません。チョウ目を
 中心に、様々な仲間(まんなか)に寄生します。体の表
 面に整然と並ぶ点刻(てんこく)の描写に、
 とりわけ気を使いました。



図6 甲殻亜門カイアシ類 Copepoda の多様な付属肢。カイアシ類はいわゆる「ミジンコ」で、
 海中から陸上まで、あらゆる場所の水中にすみます。昆虫同様にそなえた付属肢(ふぞくし)が、
 同じ起源を持ちながら、いかに形態上での多様性をみせているかを示しました。

を持たせた標本画を、いくつか示して
 みました(図1~5)。多くの皆さんは、
 そのような図に、まず視線が向くこと
 でしょう。しかし、一見してひじょうに
 地味な“線画”の方が、色々な情報
 が分かりやすく描き出されている場合
 も多いのです(図6)。「線」のみか
 ら成る、もっともシンプルな表現型で
 ある線画こそ、観察ポイントや情報の
 要点を読み取る上での格好の手法と
 云えるでしょう。

「観察」を「絵」にすることのすすめ
 ~「見る」事と、「観察する」事の間
 で~

日常の中、誰もが見慣れている生き物
 が必ずあることでしょう。例えば、スズメ
 やツバメといった、ごく身近な鳥。その
 姿を、絵にしてみたらどうでしょうか。他
 にも、子供たちにも人気のカブトムシの
 角の形では？

このような問いかけをした場合、見慣
 れたはずの対象を、正確に描けること
 は、決して多くはありません。このことは、
 普段目にしていながらも、それを「深く
 は認識していない」ことを、端的に表し
 ています。

“観察力”を高めるひとつの方法

モノを「観察する力」を養うには、さ
 まざまな方法があります。しかし、もっ
 と簡単に効果が大きいのは、やはり、
 見たものを「スケッチし、図にする」こ
 とでしょう。

いかに熱心に対象物に向き合った
 つもりでも、目的意識を欠いたままで、
 ただ漫然と眺めるだけの「観察」は、
 ただ「見る」のと、同じ度合いの認
 識しか生まれません。ヒトの脳は、映
 像をみただけで、自ずと「理解した」
 と、過大評価してしまう傾向があるか
 らです。

しかしそこに、“より正確な、絵とい
 う形での具体化を”といった、意識上
 の「重み付け」が加わり、なおかつ、「写
 実」を目指した実際の「手作業」を経る
 ことで、「空想」が入り込む余地は、確
 実に大きく減ります。

このようなプロセスをいとわずに繰
 返すことで、結果的に、観察力は自然
 と高められてゆくに違いありません。